

医療の進んだ今日、長寿国日本の現在父を思い出し悔やまれて仕方ありません。母は八十歳でこの世を去りました。

引揚者はたくさんの財産を失いましたが子供だけは何よりの財産と思い一生懸命になって育ててくれた母に心からの感謝と本当に御苦労様でしたと言ひ、永のお別れをしたのです。

最近日ソ友好も盛んになって来ましたので是非折をみて父が亡くなった地であり、私達が生まれ育ったあのなつかしい山や川を今一度この目で見たいと思つています。

敗戦体験と引揚後の労苦

北海道 山本フジ

夢にも思つていなかった敗戦に直面、とても信じられなく、昭和二十年八月下旬にソ連戦車隊三十台近くがごう音とともに私の目前を通り過ぎて行き恐ろしい思いを

しました。

二十年八月十五日には豆を打つ音がはげしく、豊原駅において日本人をうつ飛行機の機銃掃射だったと聞き、この先どうなるのか毎日不安で一ぱいでした。また日本兵が四列になりシベリヤに連行されて行く姿が今でも目から離れません。毎日のようにソ連兵のドロボウ、一日中鉄ぼうのなりばなしでときどき日本人も殺害されました。

私の嫁入りタンスなどは逃げ場の踏台となり、毎夜モンペ姿で寝、長靴、衣類を用意しました。すぐにソ連将校の家族に部屋貸しを余儀なくされ同居生活、マダムがときどきヒステリーをおこし、真赤な顔でさげび、部屋中をたたくなど、さまざま事件が毎日おこり、とても書きつくせません。私は二十八歳で二人の子持ち、二十一年十二月中旬に極寒の中で引揚げのため部落を出まして真岡へと汽車の旅、夜九時頃につき、雪ですべりながら真岡女学校あとに大勢の人が船待ちをし、黒パンの配給、夜はとても寒く、二週間近く引揚船到着を待ちました。

両親は寝込み、満一歳の子の世話、オムツ洗い、五十枚のオムツもぬすまれ、十枚になってしまいました。便所は遠くはなれ、吹雪の中、翌年一月二日にやっと乗船したが波荒くしくてひどいものでした。

函館につく頃には一歳の子が集団ハシカにかかり、高熱で函館の検免所（裏が墓場）で死亡、老人、子供達ばかり三十近くのお棺がならび涙があふれ可愛かった子供の死顔が目に見え、今でも涙ぐみます。

僅か一人千円の支給で小樽の兄をたよって一冬世話になりましたが、生活費をかせがなくてはなりません。神経痛で右足がひきつり歩行も困難となったが半月でよくなり、卵を仕入れるため野幌までの汽車の切符買いに一晩中駅に立ち、やっと予備券で購入して卵を三百個背中にかつぎ、小樽市内の店におろし手間賃を稼ぎ、三日に一度でやっと一か月を食べることが出来ました。

五月に道南の湯ノ里へ入植の話があり、ササ小屋を建てて仮住まい生活、食糧の配給は一か月米一升で後はアメリカのとうもろこし・いもなど、ワラビを毎日食べながら近くの苗圃の出面仕事、とうとう入植の土地も未決

定でしたので、十月下旬に内地の三重県、夫の両親のふるさとへと転居したのです。引揚者は邪魔ものあつかいで白い目で見られ、親せきの納屋暮らし、ネンネコの綿をぬきビロードのコートをうり、借金してミシンを購入、手仕事で稼ぎ、二十三年一月に子供が出産、一里も遠い農協に勤務しましたが、下駄ばきで下り坂は走り、冬のカラッ風で身もちぢみ、生きた気もしませんでした。そのうち国家試験を受けるべく勉強と自転車のけいこにあぐれ、二十七年三月には三重県の公務員に採用され、月給生活となり生活が安定しました。しかしこの間姑は冬期間中、病気で医者にかかり、又二十七年には借金して新築、家は出来たが毎月の借金の返済、二千八百円でぎりぎりの生活です。

二十八年には姑は病死、おじいさんは目くら、三十三年は主人の病死、暑さには弱く、馴れるのには言葉に言い表わされない苦しみを味わう。

三十五年には北海道に転勤、目の見えないおじいさんと子供一人、私と三人（長男は内地の高校入学のため下宿）その年おじいさんが死亡、その間子供の教育、四十

五年に家新築、借金返済のため日夜努力したが、アッと云う間に六十歳となり、職業婦人として三十年たち、退職してから十年余現在のはのんびり一人暮らしをしています。すが、今だに苦しかった人生をふり返っている毎日です。

二度と再びあの苦労はと思う今

北海道 北野喜美

一九九〇年八月二日のイラク軍の突然のクウェート侵攻を新聞、テレビは、在留邦人婦女子の引揚げ、一般邦人の人質拘留、軟禁と大きく報じました。

四十五年前の八月二十二日夫を残し、十四歳を頭に六人の子供を連れ、緊急疎開の名のもとに樺太大泊港から稚内港に上陸、夫の帰国するまでの三年間の悪夢、二度と再び思い出したくないと思っていたことを、またも戦禍のための引揚げだ、拘留だと同じようなことをなぜ繰り返さなければならぬのでしょうか。腹立たしい思い

にかられ当時を思い返して見ました。

昭和五年勤務していた樺太豊原貯金局を退職、鉄道員の夫と結婚。豊原、落合、中野、鶴巣、久春内、大泊、豊原と樺太各地を駅長稼業の夫と共に転住、三男三女の子供達と幸せな毎日でした。八月九日突如としてソ連の参戦八月十五日の終戦となった。

当時樺太鉄道局真岡出張所に赴任していた夫が、二十一日帰宅疎開だと、荷物は後から送るからと着のみ着のまま、豊原空襲を逃げ回りながら貨車で大泊港へ、波止場の岸壁の人波の中を乗船、甲板の片すみへ家族を座らせ「仕事が残っているから」と夫は下船。女子供に限る緊急疎開といいながら、ご主人と一緒に人達を羨望の目で眺めながら、一緒に船の上まで乗ってなぜ下船しなければならぬのか、馬鹿正直過ぎたのではないかと恨みながらの三年間の長かったこと。

煙突の下の甲板は降ってくる大つぶの油煙をかむこともできないほど、身動きもできない船上からは豊原の空襲による天を焦がす猛火を「終戦後一週間もたった今、なぜ」と周囲の人々の憤りをききながら稚内へ。